

学研 おんがく通信

Web版も
あるよ

♪バックナンバーが
閲覧できる!
♪ウェブならではの
情報が満載!

5月号

2012
年
4
月
25
日

Gakken

(株)学研パブリッシング 音楽出版事業室
〒141-8412 東京都品川区西五反田2-11-8
Tel. 03-6431-1220

学研 おんがく.net <http://gakken-publishing.jp/ongaku/>

学研 電子ストア <http://ebook.gakken.jp/gstore/>

今月号で『おんがく通信』も発刊1周年を迎えました。いつもご愛読くださり、ありがとうございます。スタッフ一同、皆様に楽しんでいただける情報をお届けできるよう、これからも頑張っまいりますので、何卒宜しくお願い致します。

もうすぐGW、外はすっかりあたたかくなり、風が気持ちいいですね。日々生活しているといろいろなことがあります。些細なこともそうでないことも。楽しいことも楽しくないことも。そんなごった煮のような日々の中で心とお腹に脂肪がついた気がします。これはいけないと思い、まずは曲がった背筋をピンと伸ばしてみることにしました。ちょっとしたことですが、いつも見ていた風景もずいぶん違って見えるものですね。(さ)

ピアノを弾くときの手のかたち

ピアノを弾くときの手は、どのような形をしていますか?

“たまごを軽く握った形”で弾くように指導された人が多いかもしれません。ところが近年、“たまごの形”とは違う表現を耳にするようになりました。どうしたことなのでしょう?

「ハイフィンガー奏法」「重力奏法」という2つの奏法がこの話のポイントとなります。

ハイフィンガー奏法：指を引き上げ、垂直に下ろす奏法。指を立てて演奏するもの。“たまごの形”と呼ばれるのはこの奏法。

重力奏法：身体の重みを利用した奏法。指の腹で演奏することが多くみられる。

指の力で演奏する「ハイフィンガー奏法」は、まだ鍵盤が軽かった19世紀のヨーロッパで主流の奏法でした。その後、ピアノが改良されて鍵盤が重くなり、身体の重みを利用する「重力奏法」が注目されましたが、日本には明治時代に「ハイフィンガー奏法」だけが導入されて、定着してしまったようです。ピアニストの中村紘子さんがジュリアード音楽院に留学した際、当時日本で主流だった「ハイフィンガー奏法」が通用せず、奏法を一新し直されたというエピソードは有名です。どちらの奏法がよいのかということがよく問題に挙がりますが、近年では、曲によってこの2つの奏法を“弾きわける”という考えが主流になってきているようです。輪郭のはっきりした硬質な音は「ハイフィンガー奏法」。伸びやかで深みのあるまろやかな音は「重力奏法」。ピアニストは、この2つの奏法を使いわけて、さまざまな音色を出し、より深みのある演奏に仕上げているのです。

それでは、指の形はどのようにしたらよいのでしょうか?

これまで日本で馴染みのあった“たまごの形”では、指先が中に入り込んでしまい、「重力奏法」(指の腹で弾くこと)が難しくなってきます。どちらの奏法においても必要となるポイントは、指の付け根を一番高くし、手首を下げ、各関節が凹まないようにアーチ状の形をつくるということ。これらに注意すれば、他の部分に力が入って手を傷めることはありません。これらの条件をクリアした表現として、最近では、“ボールを持った形”や“風船を持った形”、“マウスを握った形”などといった表現が、登場してきています。

ご自身の手を見てみましょう。大きい? 小さい? 指が長い? 短い? 4の指が2の指よりも長い? それともその逆? ……。周りの人と比べてみると、いろいろな特徴に気づかされます。ピアノを弾くときの手の形や奏法は、体格や手の特徴に合わせて十人十色。それぞれの手に合ったオリジナルの奏法を探して、ピアノ演奏を楽しみましょう。(いも)

(参考文献)「ピアノを弾く身体」(春秋社)「チャイコフスキー・コンクール」(中央公論社)ほか

インサツのための吹奏楽雑誌

インザッツ

『インザッツ』は、吹奏楽を愛する中学・高校の吹奏楽部員の皆さんと
いっしょに作っていく雑誌です。(vol.1&2ともに絶賛発売中!)

- 小説「インザッツ」の続編を掲載!
- 吹奏楽部を100%楽しむ方法をプロの奏者や吹奏楽部の先輩からアドバイス!

Vol.2 スペシャルメニュー お話盛りだくさん!!

- ★「淀高」顧問・丸谷昭夫先生インタビュー
- ★『青空エール』作者・河原和音さんインタビュー
- ★クラリネットカルテット「カラフル」インタビュー
- ★フルート奏者・前田綾子さん×作曲家・真島俊夫さん×作曲家・天野正道さん座談会

インザッツのホームページでも吹奏楽情報続々更新中!
→ <http://www.einsatz-web.jp/>

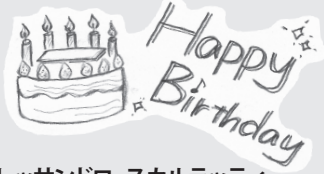
びあのどリーむ 情報

びあのどリーむ
20th
Anniversary

「びあのどリーむ」シリーズが誕生した1993年。この年は、編者の田丸信明先生が音楽活動30周年を迎えた年でもあったのです。当時、すでに大ベストセラー「おんがくドリル」「ピアノの森」で著名な田丸先生が、節目の年に満を持して世に送り出したオリジナル・ピアノ導入メソッド、それが「びあのどリーむ」シリーズです!(蛇足ですが…ということは、田丸先生は、来年音楽活動50周年をお迎えになるというわけですね!素晴らしい!) (か)

5月18日はサンソン・フランソワの誕生日!!

(1924-1970)



サンソン・フランソワというピアニストをご存知でしょうか？

亡くなったのは1970年のパリ。あと一息でドビュッシー全集の録音を完成できるところでした。わずか46歳です。死因はおそらく心筋梗塞。それまでもたびたび狭心症の発作があったようなので持病といってもいいのですが、それでも終生片時も酒とタバコを手離さず、昼夜逆転したような生活を続けていたというのです。無頼派とか破滅型という言葉がおのずと思い起こされます。

ピアニストで文筆家でもある青柳いづみこさんが『ピアニストが見たピアニスト』という著書で愛惜の思いがこぼれてくるような一章を書いています。思いすごしかもしれませんが、いくら取り乱したような風情さえ見受けられます。サンソン・フランソワのピアノには、危ういながらも強く人を魅してやまない人間的な何かが秘められていると感じられてなりません。のこされた録音をCDで聴くと、まずピアノの音そのものに血が通っているように思えるのです。フランソワは正確に譜面どおり弾くことにそれほど頓着しなかったようで、編集が可能なスタジオ録音でも弾き間違いなどそのままにしています。しかし、その演奏は天衣無縫な靈感に富み、生彩を放っています。5曲しか録音されずにのこされたドビュッシーの「12の練習曲」について、青柳さんは書いています。「ポリーニ、ペロフ、内田光子、岡田博美。腕自慢の名手たち」の録音と比較して「フランソワは、彼らの指からすべり落ちてしまった多くの貴重なものをすくい上げています」と。

今年はドビュッシー生誕150年の年です。ドビュッシーの時代を髣髴とさせるのは、誰よりフランソワのピアノだろうと思うのはわたしだけでしょうか。

パリの5月はマロニエの白い花が、まるでフランソワの誕生日を祝福するかのように咲き乱れていることでしょうか。(え)

♪アレクサンドロ・スカルラッティ
(イタリア/指揮者/1660.5.2生)

♪アナトーリ・リャードフ
(ロシア/作曲家、音楽教師、指揮者/1855.5.11生)

♪エーリッヒ・クンツ
(オーストリア/オペラ歌手(バリトン)/1909.5.20生)

♪ベニー・グッドマン
(アメリカ/クラリネット奏者、バンドリーダー/1909.5.30生)

今月の

あかね先生



『ちいさなおんがくかい』の世界が体験できるiPhone&iPadアプリ「ピアノひけたね!どれみふあむらのたんけんたい!」がもうすぐ公開!初回は無料(2曲入り)!!!(いも)

今月のセミナースケジュール

- 5/15(火):[愛知県/名古屋]松栄楽器 名古屋店
『子どもが飽きないリズムのレッスン!』
- 5/16(水):[岐阜県/大垣]松栄楽器 大垣本店
『子どもが飽きないリズムのレッスン!』
- 5/29(火):[茨城県/つくば]
ヤマハミュージックアベニューつくば
『1音からはじめる楽しいピアノ・レッスン』



UDAR

〇うださんが作った新しい楽器

ウダー ~ 其の十一 ~



ウダーの形状の微妙な変更に対して、編集部で作成したものの、それは紙で作ったウダーでした。紙で作る部分は外観のみで、センサーや回路はもちろん組み込まれていません。ただ、実際に形を変えて、ウダーの操作感がどれだけ変わるのかを宇田さんと開発に携わっているメンバー全員で体験してみたかったのです。写真の通り、お世辞にもきれいなできではありませんが、手に持ったときの感触は十分に確認することができました。操作部が十二面になることで、指をなめらかに滑らせることは多少難しくなりますが、演奏の大部分は目的とする音程の部分を押すことで、その点に関しては初心者にとっては、圧倒的にあつかいやすくなります。ウダーの本質である「微妙な音程を殺すことなく、「難なく目的の音程を出す」ことを改善できそうです。宇田さんも、何度も握りなおしてみたり、実際に演奏するポジションで指を動かしたりしています。試作のポリエチレン・インタフェースも取り付けてみたりしながら試してみます。どうやら、これなら初心者でもいけそうです。(つづく)



New!!

日本の心

新コーナーです!

このコーナーでは「童謡」を採り上げ、この日本固有の音楽(文化)の素晴らしさをお伝えしていきたいと思えます。「童謡」というジャンルが、児童雑誌『赤い鳥』の創刊(大正7年)により誕生したことはご存知ですね? 代表の児童文学者、鈴木三重吉の「芸術性豊かで、子どもたちの空想力や情緒を育むような曲」を子どもたちに与えたい、という思いが反映された作品がたくさん作られました。この『赤い鳥』については別の機会にお伝えするとして、では、童謡の第一号となった曲は何でしょう...? ...それは...、西条八十(やそ) 作詞・成田為三(ためぞう) 作曲の「かなりや」。「赤い鳥」に発表された童謡の中で、楽譜付きで掲載された初めての曲なのです。「クリスマスの夜、教会にいた数羽のかなりやの中で、一羽だけ鳴かないかなりやがいた。まるで歌を忘れてしまったように思えた」と、八十自身がみた光景が描かれています。3番までと4番で、曲と歌詞の雰囲気や大胆に変わるのが特徴で、人々に大正デモクラシーの「自由と豊かさ」を感じさせたのです。(く) *参照「わたしの心の歌-春」(学研パブリッシング刊)



つむりの

練習手帳



春休みに入ってすぐ、つむりの発表会がありました。初めのおじぎが、今年は何だか「と中でやめた前くつ」みたいで、いっしょに一生けんめい練習したママはがっかりしていました。『朝の集合ラッパ』は上手にひけたけど、『てじなし』は、やっぱりモタモタしていました。終わりにお花をあげようとしたら、初めはムシされて、呼び止めたらひったくって帰っていきました。ムツ。(くいしんほかつホホなお兄)

つむり現在の楽譜

- ◎ギロック:こどものためのアルバム 発表会の曲=「手品師」
- ◎バステイン:ピアノバイシックス1 発表会の曲=「朝の集合ラッパ」
- ◎ピアノフレンド2
- ◎こどものハノン上



お詫びと訂正

「学研おんがく通信 2012年3月号」今月のお客さまコーナーに誤りがありました。正しくは右のとおりです。 × 誤「eingestricheme」 → ○正「eingestrichene」 × 誤「zweigestricheme」 → ○正「zweigestrichene」

Tsubuyaitter

編集部のつぎはいつにー!

同期会を開催しました。今はメールで日程調整ですが、昔は幹事、たいへんだったよな〜。メールは便利でいいけど、ちょっと味気ない気も…。 (@いわ)

follow me!

twitter やってます! @gakken_music 日々のよしなしごとや最新情報をツイートしています!